

法律事務所 家事手伝い

川口 世文



6

東京コンデ
アパレルズ
TOKYO CONTE BRIS

第6話「夏越圭介も真夏のトレース」 4 池袋

「〈F Bエージェンシー〉の`F B、ってどういう意味なんですか？」

池袋西口の大通りに面したビルの2階にある、当の会社のロビーに座った夏越《なごし》圭介は、隣に座っている筧川《おいかわ》丈一郎に目を向けた。今日の彼の服装は、また涼しげな浴衣と角帯に戻っていた。

「`ファミリー・ビジネス、の略みたいですね」

筧川は脇にあるパンフレットラックから「会社案内」を1部取り上げてパラパラとめくった。

「`ファミリー・ビジネス、ねえ……」

圭介は苦い表情になった。撮影現場にエキストラを派遣することを主な業務にしている会社だが、一方で家族を`レンタル、する仕事も手掛けている。どちらも人を派遣するわけだから、彼らにしてみれば`現場、が違うだけなのかもしれない。しかし、`レンタル家族、という言葉はどうも響きが悪い。

しかも女房が自分に黙ってそこに登録していたと聞かされた圭介は気分が悪かった。

「どうぞ、奥へ……」

疲れたようすの女性事務員に案内された奥にあったのは、板張りの床で、壁の片側が全面`鏡張り、になった小さなトレーニングルームだった。

日焼けした体と真っ白な開襟シャツのコントラストがやけにきつい若い男が2人を出迎えた。

「あいにく応接室が埋まっておりまして、こんなところで失礼します」

とって圭介に名刺を差し出してから、小さなイスを勧めた。若い男は安田といい、〈F Bエージェンシー〉に登録している筧川とはすでに面識があった。

「夏越さんのご主人なんですか？」

圭介は何と答えたらいいかかわからず、筧川を見た。

「行き違いがあって奥さんと連絡が取れなくなってしまったので、こちらで何かご存じではないかと……」

筧川は緊張したようすもなく代理で答えた。圭介の妻がここに登録していることは圭介も知っている——そう口裏を合わせていた。

「携帯の電源が切れていることに気づかないのかもしれませんが。ちょっとそそっかしいところがある妻なので、ぎこちないセリフを圭介は口にした。

安田は「それはお困りですね」と特に警戒したようすもなく、黒いクリップボードに挟みこまれていた書類をめくった。

「おかしいな……夏越さんは先週の日曜日に一件、この近くで小さな仕事をやってもらっただけなんですけど」

それ以降、今週は`レンタル家族、の仕事はしていないし、事務所にも姿を現していないという。

「もともとスポット契約といいますか、このスタジオの講師の荒熊先生のご紹介で来られた方ですから……」

安田が漏らした一言に圭介はすばやく反応した。

「——荒熊？」

彼の脳裏に、青々とした髭の剃りあとと、手の甲に黒々と生えた毛が特徴的な小男の姿が甦ってきた。やっぱりあの男が絡んでいたのか？

「あの…… 劇団、の方にお問い合わせになったらいかがですか？」

気がつくやうに安田がそういつていた。笈川もそれは初耳だったらしく、2人は同時に「劇団？」と声を上げた。

「ええ、荒熊先生が座長を務めている 劇団大熊座、ですけど——あれ、ご主人、ご存知ない？」

呆けた顔でうなずいた圭介を見て、安田はおもむろにクリップボードの後ろから、1枚のチラシを取り出して見せた。

「できあがったばかりだつていつてました。秋の公演の最終稽古に入る直前なので、資金稼ぎに忙しいといつてましたから、慌ただしく動いているんじゃないですか、きっと夏越さんの奥様もいつしょに——」

A4サイズのカラー刷りのチラシには「劇団大熊座定期公演」とあり、『三毛猫ルパンの恋泥棒』というタイトルが大書されている。

カミさんが劇団員？ しかも荒熊が座長の劇団？——そんなことはありえない、と圭介は心のなかで否定した。休みの日にコーラスの練習に行っていることは知っていたが、こんな話は聞いたことがない。絶対ありえない。

だが、公演キャストの一覧に「夏来夏美」という名前を見つけた圭介はちょっとそれが気になった。あいにく写真は印刷されていない。

「今後、夏越さんがこちらの仕事をされる予定はあるんでしょうか？」

笈川が話題を変えた。

安田は「いえ、しばらくは何も入っていません」と首をふった。

「資金稼ぎに忙しいのに何も入れていないんですか？」

と、和服の男がさらに追及すると、

「どうなんでしょう？……荒熊先生はほかにかなり割りのいい仕事をされているようですから」

「どんな仕事ですか？」

「さあ、それは……」

安田はもう一度首を振ったが、あながち何も知らないわけではないようだった。その証拠に、

「あの、当社のサービスは決していかがわしいものでも危険なものでもないのです、ご理解ください。常にチーム

で行動させていますし、顧客の事前調査も十分にしていますから」

と、突然、聞かれてもいない釈明をりはじめた。

「たまたま今日は夏越さんに仕事をご依頼していないので連絡先はわかりませんが、派遣している最中は、常に居場所を正確に把握しておりましたですね……」

「いえ、もういいです。わかりましたから」

圭介は力なく手を振って日焼け男の言い訳を封じた。

「最後にもう一度お訊ねしますが——本当に私の妻の居場所をご存知ないんですね？」

若い男と正面から向き合っ、圭介はそう訊ねた。

「残念ながら……」

安田は至極残念そうに何度も首を振った。

×

「筧川先生は結婚しているんですか？」

池袋駅に向かって引き返しなが、思わず「先生」と呼んでしまったことが、圭介の弱気をよく表していた。

「いえ、まだ……」

「おれみたいに情けない男の姿を見ていると、幻滅するでしょうね？」

自虐的にそういった。筧川は黙っててくれた。圭介は手に握りしめていた「劇団大熊座」のチラシに目を落とした。

「これからここに電話をかけて「うちの妻がそちらに在籍していないでしょうか？、なんて冷静に訊けますか？——「うちの女房は今、どこにいるんでしょう？、なんて、そんな情けない質問ができますか？」

圭介は疲れきっていた。釜茹でのような暑さのなかを〈三毛猫〉まで帰る自信さえなくなっていた。

「それじゃあ、ぼくが訊いてみますよ」

ふいに筧川がそういった。

「ぼくが引き受けた仕事なんですから、最後までぼくが調べます」

と、圭介を励ますようにつづけた。

「筧川先生……」

今さらながらに筧川のありがたさが身に沁みた。圭介1人で途方に暮れていたことを考えると、ここまで妻の足跡を辿ってこれたこと自体、奇跡のような気がした。

「ああ、そうだ——」

その筧川が金色の懐中時計を眺めながら立ち止った。

「ちょっと寄り道して行きませんか？」

と、池袋西口公園の方向を示す。

「寄り道って？」

「まあ、いいからいいから。ちょっと頭をスッキリさせましょうよ」

笈川はそのままどんどん公園の方に進んでいき、噴水の脇を抜けて奥にある常設ステージを目指していった。

仕方なく圭介が後についていくと、ステージの手前で敷石が大きな「同心円」を描いているその中央でふいに立ち止った。

「ちょうどいいタイミングだな」

そういってもう一度時刻を確かめる。

と、そこへマイケル・ジャクソンみたいな黒い帽子とジャケットを身につけた1人の若い男性が、キビキビしたダンサーのような動きで近づいてきた。

「いやあ、どうも」

笈川が彼に向かって軽く手を上げると、ダンサーは挨拶を返すように掲げた手をグルッと回して、キレイのいいポーズで静止した。

いったい何がはじまるんだ？——圭介がそう思ったとき、今度はCDプレーヤーを片手にぶら下げた別の若い男がプレーヤーを地面においてプレイボタンを押した。

池袋西口公園の中心で大音量の音楽がはじまる。それはテンポのいいダンスミュージック風にアレンジされた『愛こそがすべて《オール・ユー・ニード・イズ・ラヴ》』だった。

当時に、公園内を歩き交っていた年齢も身なりもバラバラな人々が一斉に曲に合わせて踊りだした。あっけにとられるほど統制がとれたダンスが突然はじまって、圭介は全身に鳥肌が立つのを感じた。

×

「さっきは驚かせてすみませんでした」

今夜もまた〈三毛猫〉の営業終了後に笈川丈一郎から電話がかかってきた。

「あれから何かわかりましたか？」

池袋西口公園での「フラッシュモブダンス」のことには何も触れずに圭介は質問した。妻の調査は最後まで笈川に頼むことにしていた。

「どうやら間違いなさそうです……」

電話の向こうからその言葉が聞こえてくると、圭介は店のカウンターに片手を衝いて、体と気持ちを支えた。

「やっぱり荒熊といっしょにいるんですか？」

最も怖れていたことを口にする。しばらく間が合ってから笈川はまるで謝るような口調で「ええ」と答えた。

「で、今どこにいるんです？」

「どうやら奥さんたちは軽井沢にいるようです」

「え——？」

圭介は驚いた。そもそも軽井沢の女友達の別荘に行くといっていた妻が、場所だけはウソをついていなかったことが意外だった。

「軽井沢でいったい何をしていますか？」

劇団の公演の「資金稼ぎ」というものがどのくらいの金額の規模なのか圭介には見当もつかない。それに「レンタル家族」は健全な仕事だったとしても、今彼女が軽井沢でやっていることもそうだとは限らない——少なくともそれは、夫にウソをついてやっていることなのだ。

「そこまではまだわかりません……」

笈川の面目なさそうな声を聞いて、圭介はさすがに自分の要求が高すぎたことを反省した。

「すみません、相変わらず先走りすぎてしまって……」

だが、笈川は彼の気持ちに伝えるように、こう決意を示してきた。

「——これから軽井沢に行ってこようかと思うんです」

※この作品はフィクションです。

(2013年7月29日公開 ©Seven Kawaguchi 2013)